

# 生 徒

第 五 卷 第 一 十 一 號

## 宗教は概念にあらざる生活なり

□ 宗教を一つの學として扱ひ、一つの信條として見ることは誤りである。宗教は其の人の信仰であり體驗である。故にそれは信條でもなく概念でもない。

□ 従つて宗教の教儀を知るといふことではなく、それが其の人の信仰となり、生活となることである。知つてもそれが信とならねばそれは少くとも其の人の宗教ではないのである。

□ 然に今時の僧侶並に信徒なるものはともすれば此の區別が判らない。

□ 宗教の學者が必ずしも宗教の信者でなく、宗教の信者が必ずしも宗教の學者ではない。それは恰も乳を飲む小兒が必ずしも乳の説明ができるものでなく、乳の説明の出来る學者が必ずしも乳の味が判つてゐるとは限らぬと同じである。

□ 私は思ふ、今時の人々は果して此の區別を眞に反省してゐるであらうかと。ともすれば自分には未だ何等の信仰も信念もなく、單なる人の信仰のみを批難するやうのことはないであらうか。

□ 學校で學んで知つたのと、それが自分の信仰であるのとは明に區別して私たちは見なければならぬ。宗教は其の人の信仰であり、生活である。如來を中心とした人類の生活が即ち吾人の宗教である。(念)



# 光明主義の色々(一)

土屋 觀 道

一口に光明主義といへば悉く一味の信仰に生きたもののやうに考へる人もあるけれども、靜かに光明主義の何たるかを調べて果してそれが悉く同一内容であるかといへば決してさういふものではないのであります。かくいへば徒に異説を稱へて平和を攪亂し、黨中黨を造るが如くに人格の低い人々には誤解されることもあるかも知れないが、其の實之を明かにするといふことは其の光明主義といふ一種の名目に捕らはれた偶象的迷信を打破して眞實なる意義内容を持つた名實相應の眞宗教を詮表することになるのであります。

然らば光明主義とは如何なるものを云ふのであるかとなれば、如來の光明を中心として生活して行くといふ信念のもとに總ての理想を實現して行くところの生活を云ふのであります。最も如來の光明とは如何なる如來の光明であるか、そして其の光明とは如何なる内容のものであるか。如來とは即ち阿彌陀佛であり、光明とは其の放ち給ふ光明であると言へば云へないことではない。

而て又阿彌陀佛とは如何なる内容の佛であるか、それは釋尊の説かれた阿彌陀佛、更に之を現代的にいへば釋尊の心の中に影じたる阿彌陀佛といふことも云へる。而てその釋尊の説かれた阿彌陀佛、若は釋尊の心の中に認められた阿彌陀佛とは如何なる佛であるか、又夫れは何によつて之を知るかとならば、私共はそれを知るには其の佛説であるとして殘された佛典によるより外に仕方がないのでありませう。

然乍ら之を嚴密に批評するならば、たとい、それが佛典であるとして世に傳へられてゐるからとて果して、それが眞實の佛典であるかは一概に斷言はできません。何となれば現に佛典として從來認められたものが段々佛典研究の結果として、後人の僞作であつたり、或は翻譯上幾多の誤譯があつたり、又それだけでなくとも佛典其のものが釋尊の説法そのもの、速記でないことは明かであるからであります。從て之を嚴密に云へばそれは其の佛典作者の心に影じたる意味での佛説であるのであつて、必ずしも釋尊その人に認識せられたものであるとはいはれない點が多いのであります。尤もかくいへばとて私は全々これが佛説でないといふのではない、或は釋尊の眞説をそのままに体得して、之を佛典に表したといふことが考へられないこともない限り、今日の佛典が悉く佛説でないといふこともいへないことでもあります。さうしてかゝる意味から云へば釋尊の言葉であるとして言い傳へられた根本佛典が必ずしも眞の佛説を傳へたものであるともいへず、又後世の人々が自分が佛説であるとして現はした佛典若くは論義解釋が必ずしも佛説でないともいへないのであります。果してそれが實際に於てどれ丈眞實に釋尊の實説を言傳へてゐるのであるかは疑問であります。

而も又そればかりではありません。同じ釋尊の佛説なりと自らも信じ、又他にも信せられた一つの佛典でも其の見るといふの人に於て各々其の要點を異にするものがあります。否更らに之を極言すれば同じ佛典を同じ自分が見てゐるへも、前に見た時と後に見た時とは其の見解を異にすることがあり、殊に甚しいものに於ては同じ佛典の中の同じ一句に於てさへ、自分乍らに其の何れの意味に之をとるべきかと考へねばならぬ時がありうる限り、まして之を時代を異にし處を異にし其の種族を異にした人々に於

て之を見ることは寧ろ同じでないと言つた方が至當かも知れないのであります。而て此の事は現に之を史實に照して見ても同じ大無量壽經に説かれた阿彌陀佛に對する考へが人々異つてゐるのを見ても判るのであります。而かも自らは偏依善導といつて偏へに善導一師によるといはれた法然上人の信仰であるといふことからは、まして其の他の曇鸞道綽惠感の淨土教の祖師たるに見るも、如何に其の見解が各々異つて來てゐるかといふことを知るならば私が前に云つた處の光明主義なるものも、之を信する所の人々によつて、果してどれ丈の同じ意味での光明主義であるかといふことは更らに充分の研究を要するものであります。

又阿彌陀佛と云ふけれども夫れが一般に如何なる意味で各人の信仰内容としてあるか之を法然上人の信じてゐられた阿彌陀佛の信仰内容と同じであるかどうか私共は更らに一段の研究を要するものであります。殊に自ら信ずることも出來ない。人々の言行若くは自ら行する事もできない從來の信徒によつて阿彌陀佛はこんなものだと理窟で教へられた概念の如き、到底私共の入るゝことのできぬものであります。その他自らには充分に體驗したと信じたところの信念にしても其の信念が果して釋尊所説の體驗と同じ體驗の内容と素質とを有してゐるか最も私共の深き研究を要するものであります。

この意味に於て同じ淨土教徒であるといふ人々の中にも果して同じ信仰内容を以つてゐるものばかりであるかは大いに私共の考へざるを得ない所であります。然してそれが同じ法然門下であるといふ人々の中に、現に真宗の開祖として立てられた親鸞上人と法然上人の直弟子であり淨土宗の第二祖とし

て立てられてあるところの鎮西上人との間には著しい信仰内容の異點を見るのであります。それらは暫く別として現に淨土宗なりとして立てる人々の間にも眞の法然上人と同じ信仰の内容に立てる人々が幾人あるであらうかは更に深き注意を要することでありませぬ。此の意味に於て自ら如來を信することもなき無信仰の人々ばかりも論外として、例へば現に自らは淨土宗の信者なり、法然上人の正流なりと人にも主張し自からも信じてゐる人々の間に於てさへも、それらの凡てが悉くその信仰の内容までも同一であるとは一概に論せられませぬ。此のことは已に偏依善導といはれた法然上人に於てさへ其の間幾分の相違した點のあるのを以て見れば今日道友の一々について之を見ればそこに幾分の相違の點のあることも又止むを得ぬことかも知れませぬ。

而も此の問題が法然上人の滅後七百年以上を經過した今日に於て幾多の時代思想の變遷が其の時代と共に其の人々の思想の上にも變つて來てゐる時に於て、果して今日の淨土教信者が只自から漫然と自分の信仰や教儀を少々異なるかのやうに見えるといふことを以て直に之を法然上人の信仰と異なるものかの如く解して自らのみその正流に居らうとするといふことは果してその當を得た考へであらうか、而して自からは寸毫の念佛に對する信念もなく、只單に嘗て學校や講習會で而かも何等の念佛に對する信仰もなき教師によつて教へられたところのおぼろげなる記憶の教義をたゞり、自らさへ信することの出來ぬ奮き信條を以て、之と異なる方の人を異安心者となし、而も之を攻撃し批難し排斥するが如きは、その不謹慎なることばもとよりでありませぬが、よしそままでいな人々でも自分と同一の信仰でないからといつて悉く之を異安心あつかいにして我一人その正流かの如き態度をとるといふことは大いに反省す

べきこととあります。本来宗教信仰の性質として一度自分の信仰が確立するときはその信仰に對しては凡てが絶対的のものとして完全なるかの如き信仰状態になるものではありますけれども、それはたゞ自分と其の人の間に於て同一の信仰でないといふに止まり、又信仰が同一でないとして之と分立するといふことは徒らに信仰の不純なる集りよりも純信の友の集りとして宗教信仰の進歩發達の點からいふても決して悪いことではないけれども、それを以つて直に自分以外の宗教が非宗教かの如くいふといふことは大に考究を要するものであります。まして、其の人の信仰が果して自分の信仰と同じであるか或は同じでないかといふことも充分に研究せずして單なる個人の利害得失、それも單なる世間の非人格的な人々の難する言葉や或は何等深く依る所なき世評にうか／＼と戴せられて直にその人の信仰や人格までも云々するが如きことは更らに慎まねばならぬことであります。

乍然こゝに最も注意すべきは自ら其の宗の信者なりと思つて自らも許し、人にも許されてゐる人々にても、それが果して其の宗の祖師と同じ信仰であるかどうかといふことであります。而て其の信仰がたゞ祖師と同じであるとしても、それが同一であると本人に自覺せられる場合もあり、又其の人には少しも同じであるかどうか意識せられない場合もありうることであるけれども、又夫れが全々同じであるとの自覺の上にも立ち得ないものでもないのであります。何となば自らその祖師と同じ信仰であるといひ得ないやうな信仰がどうして其の祖師の教へと同じ信仰であるといはれませう。自分の信仰が祖師の信仰と同一であり、同じ教へであるとの信仰であつてこそ、初めて其の人の教ゆるところの教團に屬するともいへるのであつて、而もそれが祖師の教へによつてそれと同じ宗教の體驗に入つたといふことが

自分に知られる時初めて其の宗教は祖師の宗教でもあり又同時に自分の宗教でもあることも知るのであるからであります。このところが即ち特に佛教の大切とするところであつて、そこに佛々相傳の傳統的眞意もあるのであります。

然に世人ともすれば徒らに自分の信仰を卑下して自分の信仰はとるにも足らぬものである、自分の信仰は全く何等の體驗もないものである、然に法然上人は三昧を發得せられた方であるといふ人がある乍然之がそも／＼宗教を語ることに眞實でない人の態度であります。凡そ宗教のこと殊に宗教信仰の内容そのものは各人各位に於ける眞實の體驗こそ最も大切なものであつて、自らに體驗のないものがどうして自分以外の人々の體驗の世界を知り得やう、さうして自分で三昧を發得したことのない人がどうして、他の人が三昧を發得したといふことを知り得やう、佛教でいふところの自信教人といふことはかゝることをいつたものでは斷じてないのであります。從て釋尊所説の念佛の信仰が直に釋尊の念佛に對する信仰の體驗告白であつてこそ釋尊の教説が權威であり、さうして此の體驗と一味の體驗が其の教へによつて得られたのが善導の念佛であり、其の信仰が淨土教の教儀を産み、之によつて得たる所の法然上人の信仰が直に善導の信仰と同一にして法然の信仰が善導の信仰と同一であるといはれ、かくて初めて法然の宗教體驗が又善導と一味の體驗といはれるのであります。而かも此の宗祖の體驗たるや釋尊の念佛に對する體驗と善導の體驗と同一なる限り少くとも念佛に對する法然上人の信仰的體驗は又釋尊と一味の體驗といはねばならぬのでありまして、此の一味の體驗が而も十惡五逆の罪惡生死の凡夫に於ても體驗し得られるといふところに彌陀の本願を中心とした普遍の念佛が眞實の宗教として人類の宗教とな

るのであります。然らば法然上人の念佛の信仰は少くともかゝる意味に於て釋尊當時の信念に於ける念佛者の體驗と一味の信仰であつて、又私共の信仰は法然上人の眞の教へによる信仰である限り、其の信仰によるこの宗教信仰の體驗は又等しく法然上人の信仰體驗と別なものであつてはならないのみならず又は釋尊自身の宗教體驗少くとも念佛信仰に對する釋尊信仰の宗教體驗と一味の體驗でなければならぬのであり、又一味の體驗であると自覺し得るものでなくてはなりません。否、かくてこそ初めて釋尊の佛説によつて眞の念佛信仰といふべきであつて、之以外の信仰といふものは結局佛敎ではないことになるのであります。

然らば一度び自分が如來に南無して得たところの眞の念佛は體驗は直にそれが宗祖の信仰と一味であり、又それが善導並に釋尊の信仰と一味であり、而てそれが彌陀大悲の本願そのものと同一でなくして何でありませう。此の意味に於て一度眞に信仰を得たものは直にそれが自分の信仰であり、そしてそれが釋尊體驗の絶對境と一味境であるといふことを味識するといふことは決して誤つた見解ではないのであります。

然に世人往々此の識見に乏しくして反つてかゝる強き眞實の確信より出でたところの信仰の體驗を充分に傾聴することなくして、反つて自から體驗もない輩らの徒らに概念化した信仰談に耳傾けて或は此の人を殊更に謙遜の人かの如くあがめたり、或は自からもそれを以て如何にも人のなすべき謙讓の徳かの如くに考へ違ひして宗教の體驗をたどらうとする人の少いのは少くとも現代的青年の眞の願ひではないのであつて、又釋尊敎説の眞意でもないと思ふのであります。

さて斯くの如く觀じ去り觀じ來つて今日の光明主義なるものを點驗し來るとき私共は果して如何の感念をなすものであらうか。此の意味に於て釋尊を一味の體驗を同じくせる聖善導の眞意を探り、それと靈光を一にした聖法然の體驗を眞に體驗した眞の行者が宗祖滅後に於て果して幾人あるであらうかは私共の最も疑問とするところであります。然に幸に私は之を我觀瑠老師と辨榮上人の信仰の上に淨土敎の眞髓を見ることが出來ました。従つて、今や私の信仰は此の二老師を通じて、宗祖の信仰と同一の信仰たることを自覺するに至つたのであります。而して此の私の考へが若し誤りでない限り、私の信仰否私の宗教體驗は直に老師若くは辨榮上人と一味の體驗であると共に、延ては又宗祖上人の體驗の世界と一味の體驗であり、更らに釋尊そのものと同一一味の體驗であるといふことが其の云ひ方に於ても亦その信じ方に於てもどうして誤りでありまう。私は此の意味に於て凡そ宇宙只一の宗教原理に基く宗教の體驗は等しく此の一味の體驗と自覺とを吾人に與へるものであることを信じて疑はないものであります。但し其の人の個性の差よりして其の人の學徳の廣狭淺深の差別あることはもとより、同律に云ふことはできぬことでもあり、それを以て私が直に其の學に於てまで老師に勝り、宗祖に劣らず釋尊に比肩するといふのではないことはもとよりであります。

然らばこゝに光明主義の色々といふことは何を意味するものであらうか。それは以上の如き意味に於ける一味の體驗もない人々の所謂光明主義者と稱ふる人々の多いことでもあります。さうして私共はかゝる人々の中間に入れられたり、或はかゝる人々から反つて惡しざまに云はれることさへあることはここに私共の最も心よしとせないどころがあります。而もともすれば單なる自發の信仰を以てそれが自分の信仰を一致せない點があつたり、或は單なる信仰以外の心の行き違ひから、自らに何等の確固たる光明主義をも有せず、反つて如來の大悲にも脊くやうな言行を違へる輩の集りに於て私共はむしろ平等の人々と同一主義なる光明主義ではないといふことを殊更らに主張せざるを得ないものであります。

## 宗教思想と社會主義問題(二)

土屋 觀道

### 三、時代思想と社會主義に就て

Ⅰ 様一口に社會主義といへばまだ我國の人々の大半はそれが直に危険思想であり、又過激思想でいもあるかのやうに考へるやうです。さうして若しも自ら社會主義とでも云はふものならば直に其の周圍の人々は其の人を以て危険思想の持主であるかに思ひ、又直に過激思想の宣傳者でもあるかに考へて之に近づくことを恐れるかのやうであります。さうして又それと同じく、否それよりも甚しい色眼鏡を以て時の爲政者若は其の配下にある所の××官當局は之に對して非常なる壓迫を加へるかに見ゆるのであります。乍然さういふ私もやつぱり其の中の一人でありまして、今なほ此の考へは一種の先入夫となつてやゝかゝる意味での社會主義といふ名前を心よからず感ずるのであり

ますが、殊に最近まで社會主義なるものが如何なるものであるかを知らない前に於て一層此の感が強かつたのであります。そのくせ一方には社會主義は如何なるものであるかを少々研究して見たい心も盛んであつたのであります。若もそんな本を讀むことにて官權の誤解を受けても面白くないといつたやうな考へから、それらに關する人々に接することや、又それらに關する著書などを讀むといふことをも差控えてゐたのであります。乍然、其後私の考へは一體社會主義といふものは如何なる主義のものであらうか、よしそれが全淨惡いものであるとしても、それが惡いならばどこがどういふ風に惡いかといふことを知ることを知ることが必ずしも惡いことではない、何となれば私共は眞にそれが惡いといふことを知つて、さう

してその惡いことを爲すものではない、否多くの場合は反て其の惡いものを惡いと知らないが爲に之を知らずして犯す場合が多い、然らば社會主義に於ても如何なるものが社會主義であるかも知らないで徒に蔓然と之は惡い思想である、危険なものである、過激な思想であるのみ考へて一概に之を排しやうとすることは少しく識見あるもの、到底爲し得べきことではないはずである。それも未だ小供の時代であるとか、或は單なる青年の血氣に速る時代ならば或は時代カブレの感もあるかも知れないけれども、今や少しでも自分は佛教の眞髓に心を傾け、如來中心の生活に一切を生きやうとしてゐる時に當つて、よし社會主義なるものが如何なるものであるにせよ、之を調べたからとて直に惡化されるものではない。して見れば其の社會主義なるものゝ如何なるものであるかを研究するといふことは決して私自身が墮落してゐるが爲めではない、さうして又一通り其の主義の如何なるものであるかを知らずしては其の主義の善惡は判らないから之等に對する正しき批判もできない

正しき批判が出来ないでどうして之を私共が是非することが出来やうか、少しくとも其の説の是非主義の善惡を見わけけるには之を直接間接に研究しなければならぬ。然に私共が此のことをせずして徒に之を批判し或は之を壓迫しやうとすることは道を求むる眞人の決して採るべき方法でない。さうして又現に國家が許してゐる範圍に於て著はさるれたる其の種の書籍を讀むといふことはもとより國法も許した行爲である。まして社會主義に共鳴した人ばかりが讀むものとも定まつてゐない限り現に私の如き考へを以て之を研究し、若くは更らに進んで社會主義の眞の欠陥を知らんが爲めにさへ之を研究するに至つては寸毫もがむべき行爲ではない。尙進んでは社會主義者其の人にも會て親しく其の腹藏ない意見をきき、又之と意見を戦はして其の是非を共俱に研究して見るといふことは眞に道を愛し、國を思ひ社會を念とするものゝ決して恐るゝ所のものであつてはならない。さへ考へたのでした。乍然私は未だそれよりも、社會の誤解、若くは當局の誤認を恐れ敢て之等の

社會主義者といはれる人々に會つたことはありません。さうして又私共の理想として考へてゐる佛教の立場からして之等の社會主義者の今日やつてゐる行動は大いにあきたらないやうに外観上ではありませぬけれども、さう考へさせられる所から會つて見る氣にもならず、又會つても見ないのであります。乍然、所謂社會主義といふものは如何なるものであるであらうか、さうしてそれが果して世に云ふやうに過激な思想であり、又危険なものであるであらうか、一つ自分自身で之等の學說なり、或は之等に對する反駁の説なりも幾分調べて見たいとは考へて來たのであります。

乍然斯くいふもの、實の所私は未だ社會主義なるものが眞に如何なるものであるかといふことを充分に斷言し得るほど詳細に又明確に研究し得てゐるものではありません。從て私の信する所が果して眞の主義者のいふ所の社會主義であるのやら、又社會主義に反對するといふ人々の心に知られてゐる所の社會主義なるものと果して一なるものであるのやら、それも確たる斷言はできないの

るものは一も二もなく讚成し、自分の考へに一致しないものは一も二もなく反對しやうとする傾きが多いやうであります。だから自分の生活や若くは思想に於て、先方の生活や思想が異なる場合は私共は直に其の人の生活や思想を不可とし、或は自分に危険と感ずれば其の人の思想を直に危険思想となし、或は其の人の説や行動が自分に過激であると感じれば直にそれを以て其の人の思想を過激思想となし、或は社會主義とさへいへば危険な思想若くは過激な行動を採るものであるかのやうに耳なれてゐる爲めに自分にとつて危険であり、過激であると考へられる思想なり、行動なりに打ちつかると直に其の人は之を以てそれが社會主義の思想であり、或は又それらの人が社會主義社であるかのやうに考へたり、或はさうだとし人にも語るやうな人々が此の世に多いのを發見するのであります。乍然、様果してかゝる考へがすべての上に正しい考へでありませうか、私には少々判りかねる點の多いのに困つてをります。否それよりもかゝる人々にかぎつて、最も利己主義

でありませぬ。それに同じ言葉は社會主義と申しましても廣義に於ける社會主義と狹義に於ける社會主義とは其の趣きが大いに異なるものであります。廣義に於ける意味でならば、今日の所、恐らくは如何なる人といへども、此の主義に反對するものはないのでありませう。殊に近頃は如何なる所にも幾分づゝかは此の主義が採用せられてゐない所はないのでありまして、寧ろ之を以つて何れの社會國家に於ても善政であるとして來たのであります。乍然狹の所謂社會主義に對しては多くの現在の國家は之を否定しやうとしてゐるのであり、又其の説におきましても種々の異なる説をもつた幾つかのものがあるのでありまして、之には一々何々社會主義と名をつけて其の混同を防ぎ、且つ其の説の一々に就ては又之に對する讚否の説も明かにせねばならぬことかと思ひます。從つて一概に社會主義といふものを一も二もなく自分の勝手に反對すると云ふことは私共に更に一考を要すべきものではありますまいか。

然に世間の多くの人々は、自分の考へに一致す

で人の云ふことを少しも考へてくれない人が多いのを何といたしませう。さうしてかゝる人に限つて自分の慾より外に考へることのできない人々が多いのであります。而して自分の考へや行ひが果して社會のためになつてゐるのかどうかといふやうなことに至つては何等の考へも反省もしない人が多くして、てんで初めから自分の考へや行動が其のまゝよいものである、又當然なものであるといふ風に考へこんでゐる人が多いのであります。だから自分の考へや行ひを以つて初めから正しいもの善なものとしてゐる爲めに之等の人々には自分の考へや行ひと異つた考へや行ひの人々を見る時は直に之を以つて不正な考へ、若くは不善な行爲者の如く考へるのであります。而もそれが萬一自分の思想や生活に於て一致せなければかりでなく少しでも其の思想や生活に於て危険な感じがしたり、過激にでも感ぜられるものならば、それこそ直にそれを以て之を危険思想、若くは過激思想であるとして、社會主義者であるかの如くに思つたり、或は之を以て社會主義であるとして、之を嫌



い之を恐れ、之を批難し、やがては之に壓迫をさへ加へやうとするものがあるのであります。

乍然<sup>1</sup>様かゝる人々の考へは果して正しい考へでありませうか。靜かに考へれば寧ろかゝる思想の持主こそ反つて危険思想家であり、又過激主義者でないかと思はれます。何となれば凡そ危険思想とか過激主義といふものは如何なる意味を持つたものでなければならぬかといふに、それは恐らく社會全體の平和を破り、或は人類の向上、社會の進歩を妨ぐるものに就ての言葉でなければならぬからであります。さうしてかゝる利己主義の人々、所謂眞に社會の進歩の爲めに寸毫も献身

的であり得ない財慾の輩、さうして自分の思想や行爲が社會國家の進歩を眞に寸毫も計つてゐないことに氣のつかぬ人達、いはば金の外には何もものもないといふやうな生活者、さうして眞の人類の幸福か何であるかも知らない人々、而も其れらが從來から教へられ又馴らされて來た所の所謂傳統的な道徳に立ち、而も自己自身にはそれさへも裏切つた貧慾の我利々々であるくせに、かうした意味から自己の安全を保護しやうとして、是等の思想に相反すると考へられたものを悉く社會主義であり危険思想であると考へる人があるのであります。

(大正一三八一六〇一於御殿場大乗寺)

## 唐澤別時念佛會概觀

會 我 尾 昌 治

唐澤の阿彌陀寺の鐘は

南無阿彌陀佛の力こもりて

段々として

十方の世界に響き渡る。

唐澤は是れ寂光の土

塵々として

天を摩す老杉と

鬱蒼として

大地を蔽ふ大樹の中に

阿彌陀寺は靜かに建てり、

万古の谷をわけて見れば、

諏訪の湖は

開闢以來

滾々としてわきし

水を湛へて穩かに

幾重にも波打つ

高原の峰は

悠久たる静けさの中に

渾然として展開す。

太陽は

燦然として輝く。

今、鐘は止みぬ。

時に紫檀の柏子木より

幽玄微妙なる音

靜かに靜かに流れ出で、

人々の心に浸渡りぬ。

三々五々のつごひ解きて

人々は皆室の中に

一例となりて

まろかに並びぬ。

柏子木の音靜かに

靜かに響く

人々は皆

心一つになりて

その響きに和して

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛と祈る。

此時聖者座を立ちて

靜かに歩み出さば

人々も亦それに續きて

延々たる列をつくる

列の歩みは

肅々として嚴かなり

佛陀に揮らるゝ

菩薩衆のごと

莊嚴淨土にまします

如來をひたすら念じつゝ

南無阿彌陀佛！

南無阿彌陀佛！

南無阿彌陀佛！

聖き祈りを一つにして

肅として列は進み

進み進んで聖堂に入りぬ。

南無阿彌陀佛！

南無阿彌陀佛！

南無阿彌陀佛！

.....

滾々として

逆り出づる

生命の躍動は

幽玄なる木魚の音

ほがらかなる

念佛の聲となりて

御堂を圍む樹枝をすきて

湖へ

峰々へ

御空へと

流れ流れぬ。

眞生同盟提唱を喜ぶ

眞生十月號に御上人が眞生同盟を提唱になりまし  
た、實に喜びの極みであります、社會改善の具体  
的發表の一日も早きを期待します、私も昨年來信

吾朋便り

口東京土屋觀道より

愈秋も深くなりました、道友の皆様には御變りも  
在らせませぬまいか、遙に思出しては限りなき懐か  
しさに堪へません。定めし道友の皆様にも又と來  
ぬこの秋の好期を利用して、念佛裡中になき活  
動の御事と存じます。次に其の後の私にはおかげ  
で一家も無事であり、近年にない心の喜びであり  
ます、それに今秋は新に傳道の地も擴まりまし  
て、神戸の住吉の方にも、又兵庫縣下の勢ち口にも、  
又泉州岸和田の方へも新生の天地が開けて來まし  
た。殊に今度の河内の得生寺に於ける三昧會の一  
週間は大阪、神戸の青年有志を中心に、彼の有名  
なる大佛前での集りでした。集る二三十名中には  
晝は大阪まで會社に通勤し、會社の終つてから夜  
にかけて日參する人々さへ多かつたことはいつも  
の三昧會と少々趣きを異にして一層に力強い感じ  
さへいたしました。

仰運動と共に先づ自己所在の町村を善くせんと本  
年春より或る改善事業に着手しました。如來慈光  
の下に念佛を中心とする友よ一勢に立ちて活動せ  
やふではありませんか。  
岐阜縣海津郡城山村山田淳應

それに得生寺の御住職は私の學友としての先覺  
であり、日夜に戀慕ふ人格の人岸信宏師であつた  
ことは私にとつてはまたなき喜びでありました。  
師は宗大を卒業後主として唯識並に宗學の專攻者  
であり、目下京都の佛教專門學校の教授であられ  
ます、私は學校時代の先輩とし又學友として特に  
信仰問題については求道者の一人として最も深き  
道友の人として尊敬してゐましたこととで、計ら  
ずも今度かうして久々に私の信仰問題を口に出し  
聞いていただいたこと云ふことは實に此上もない喜  
びの極みでありました。定めし御意に充たぬ點も  
多かつたことと存じますが、とにかく私の自由な  
信仰の立場から宗乘に對する批判と今後吾人のと  
るべき信仰の態度とを思ふ存分に語り得たことは  
近來にない私の喜びでした。それに人里離れた靜  
寂の靈地としての此の寺が私には又一しほに意味  
深く拜せられてなりませんでした、それに國寶と  
して安置せられたるあの壯嚴極まりなき丈六の大  
佛は眞に心からなる尊嚴の極みでありました。道  
友ので大阪方面にある旁々ほもとよりさうでない

ほとの人々でも阪神地方に参られた際には一度御参拜のほど御すゝめいたします。

次に目下私の學寮では震災以後永らくそのまゝになつてゐた、家の倒れを直し、屋根を葺き更へ壁を塗かへるなど大變です、それから勉學室として六疊の二階屋も出來あがりつゝあります。全体としての住居は少々感ずる所あつて狭くしますが

### 寄贈並に誌料拂込芳名

- 寄贈の部
- 金五圓小栗利吉様全吉水文雄様全内田千代様全  
神戸道友某女様全刈敷恒様
- 金拾圓堤清次郎様 三、五、〇〇
- 誌料の部
- 金貳圓宇平光太郎様全權藤實融様全八木信剛様  
全吉田富太郎様全小幡伯鳳様
- 金五圓清水恒三郎様全渡邊金次郎様全三上行海様
- 金三圓八島七郎治様 〇、〇、〇
- 金壹圓深見真達様全松平圓通様全梅生信隆様全  
村山眞次郎様全日比性賢様全岐阜永徳庵様全荒  
川次郎様全神谷學周様全内田くま里様全内田とし  
様全氏川俊徹様全板谷光之様全淺井清順様全後  
藤市男様全後藤武雄様

R. N. O

居こゝちは一層よくなるつもりです。之も今後の活動の爲め、又一面には道友の宿舍にも兼ねてと思ひますれば又喜びに堪えませぬ。  
それに各地から眞生同盟の提唱に對して愈其の旗擧に參加したいと申込む人の多いのを心から感謝いたします。信仰ある人々の如何に社會に生きるかは正に吾人の最大自覺を要する點であります

- 金三圓八十錢京都專故庵様
- 金壹圓五拾錢新谷天外様全平野博之様
- 金六拾錢松谷眞淳様
- 金五拾錢廣島川尻町眞福寺様全吉村えい様全長澤みね様全櫻井とよ様全大塚はる様全城島林太郎様

(次は次號は) 一、一、六

定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓  
振替口座東京四七二八番 眞生社  
東京市芝區芝公園第十四號地九番  
編輯兼 發行所 眞生社  
東京市芝區芝公園第十四號地九番  
發行所 眞生社  
東京市芝區三田四國町二番地三號  
印刷所 三井清次  
東京市芝區三田四國町二番地三地  
印刷所 玄々堂印刷所